

1. はじめに

本稿では、数量詞遊離現象に関して、Sportiche(1988)で主張された数量詞の移動分析（残留分析）の観点から、v*P 周辺部が豊かな構造を持つことを仮定し、v*P 周辺部における数量詞遊離文の派生を考察する。その際、Chomsky(2013, 2015)で提案されたラベル付けアルゴリズムの枠組みにおいて、数量詞が特定の位置で遊離できない場合、投射のラベルが適切に供給されていないことを示す。一方で、ラベルが適切に付与されることで、比較的自由的な分布を示すとされる v*P 周辺部における数量詞遊離現象に対する理論的な派生を提案する。

2. ラベル付けアルゴリズム

2.1 Chomsky (2013, 2015)

Chomsky(2013, 2015)では、併合により形成された投射をどのように決定するかに関して、以下のような提案がなされている。

- (1) 集合 {H, XP}において、H が主要部で XP が主要部ではない場合、H がラベルとなる。
- (2) 集合 {XP, YP}において、XP と YP のどちらも主要部でない場合、
 - a. XP と YP における共有素性がラベルとなる。
 - b. XP と YP のどちらか一方が移動することで、残留した句がラベルとなる。

2.2 ラベル付けに対する提案

本稿では、コピーはラベルの決定に参与しないという想定の下、集合 {H, XP}において、XP が集合外へ移動した際、この集合のラベルは H と決定されることを提案する。

- (3) The students_i seem [_β [_α all t_i] [_{TP} to know French]]. (Bošković (2004: 681))

上記の構造において、集合 {Q, DP}を形成するラベル α は、ラベル付けアルゴリズムにより、DP が主語位置に内的併合されることにより Q と決定し、 β のラベルは QP と特定される。

3. 分析

3.1 v*P 内補部位置における数量詞遊離

Chomsky(2013, 2015)で提案された枠組みの下で、v*P 内補部位置における数量詞遊離に関しては、ラベルが適切に決定しないという点で、非遊離文との文法性のコントラストを適切に捉えることが可能となる。

- (4) a. Mary hates all the students. (Bošković (2004: 682))
 b. [_{v*P} v* [_γ all the students [_β R [_α all [_{DP} the students]]]]] (α=QP, β=R, γ=<φ, φ>)

- (5) a. *Mary hates the students all. (Bošković (2004: 682))
 b. [_{v*P} v* [_γ the students [_β R [_α all [_{DP} the students]]]]] (α=Q, β=??, γ=<φ, φ>)

非遊離文を示す(4)において、*all the students* は目的語繰り上げにより R 指定部へ移動する。この場合、v*が派生に導入され、適切にラベル付けが行われる為、文法的な文が適切に予測される。一方で、遊離文(5)において、*all* を残留させ、*the students* のみが R 指定部へ移動した場合、 β のラベルが主要部—主要部構造により適切に決定しない為、派生が破綻する。このメカニズムは、非対格文や受動文における、動詞の補部位置での数量詞遊離が許されない事実に対しても適用可能である。

- (6) a. *The students arrived all. (Bošković (2004: 682))
 b. *The students were arrested all. (ibid.)
 c. [_{CP} C [_γ the students [_{TP} T [_β <R, v*> [_α all [_{DP} the students]]]]]]] (α=Q, β=??, γ=<φ, φ>)

Epstein, Kitahara, and Seely(2016)に従い、非対格・受動文において、R と v*は外的対併合した後、派生に導入されると仮定する。非対格動詞、受動分詞の補部位置に *all* を残留させアソシエイト名詞句のみが主語位置となる TP 指定部へ移動した場合、ラベル付けの際、<R, v*>と Q の主要部—主要部構造により β のラベルが決定せず、派生が破綻することを適切に予測できる。

3.2 v*P 周辺部における数量詞遊離

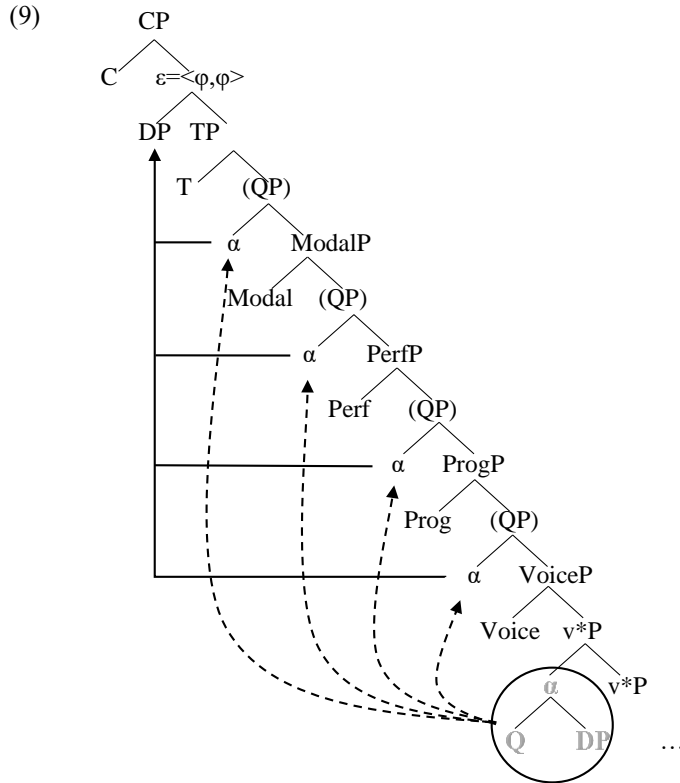
Cinque(1999)では、v*P 周辺部は普遍的に豊かな構造を持つと主張し、以下の階層性の存在を記述している。

(7) Tense > Modality > Perfect aspect > Progressive aspect > Voice > Verb

上記で示す階層性を考慮に入れることで、v*P 周辺部における数量詞遊離は、アソシエイト名詞句を補部に取り数量詞句が、v*P 周辺部投射の指定部へ内的併合した後、数量詞を残留させ、名詞句のみがさらなる移動の対象となる場合に生じると提案する。

(8) The doctors (all) may (all) have (all) been (all) examining the patient.

(Cirilo (2012: 812))



上記に示す派生において、v*P 内主語位置に併合された集合 α は、v*P 周辺部へ内的併合され、その位置で数量詞が残留し、名詞句のみが TP 指定部へ移動することで数量詞遊離が生じる。この際、 α のラベルはフェイズ主要部 C が派生に導入された後にラベル付けアルゴリズムにより Q と決定する為、各周辺部投射は QP のラベルが与えられる。従って、ラベルの問題を引き起こさず、適切文を予測することが可能となる。

参考文献

- Bošković, Željko (2004) “Be careful where you float your quantifiers,” in *Natural Language & Linguistic Theory* 22, 681-742.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of projection,” *Lingua* 130. 33–49.
- Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 1-16, John Benjamins, Amsterdam.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*, Oxford University Press, Oxford.
- Cirillo, Robert (2012) “A Fresh Look at the Debate on Floating Quantification,” *Language and Linguistic Compass*, 6. 796-815
- Epstein, Samuel, Kitahara Hisatsugu and Daniel Seely (2016) “Phase Cancellation by External Pair-Merge of Heads,” *The Linguistic Review*, 33, 87-102.
- Sportiche, Dominique (1988) “A theory of floating quantifiers and its corollaries for constituent structure,” *Linguistic Inquiry*, 19, 425-449.